

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 あんど う ひろし
安藤 宏

本論文は、明治から昭和に至る近代小説について、「小説」というジャンルの特質を、個々の作品を越えて共通するところの「表現機構」という概念に添って、明らかにしたものである。本書の構成は、「表現機構」を総論的に検討した第Ⅰ部に、「小説家」という機構」以下の九章を収め、近代小説の代表作を取り上げつつ各論として「表現機構」を検証する第Ⅱ部に、「森鷗外『舞姫』— “重霧の間、にあるもの”」以下十三章を収める。

第Ⅰ部は、作品全体を統括する三人称的視点と、場面密着の一人称的視点を両立させるために、作中の小説家が自ら小説の成り立ちについて言及する「小説家小説」が独自の「表現機構」として発達したこと、「言文一致」の文体の文末詞「た」が、三人称的視点と一人称的視点の折衷による「話者の顔の見えない話し言葉」として合意されていたこと、一人称小説の特質に「当事者性（現場のリアリティ）」「対話性（読み手の囲い込み）」「メタ性（物語の成り立ち）」の三つがあること等を詳細に論じて、近代小説において視点の「人称」が持つ重要な機能を明らかにしている。また、近代小説を特徴づける「個」や「個人主義」について、漱石や鷗外の作品に表れる「個人主義」が、自己を確固としたものと信じられず、公私の相対関係の中でフィクショナルに立ち上がってきたものであり、また「個」を照らし出す装置として「自然」の理念が虚構化されていたことを鮮やかに論証している。さらに、「文壇」という概念が作品表現の内部で機構化されていたことを指摘し、「私小説」の成立に「表現機構」としての「文壇」が果たした役割の重要性や、大正末から昭和十年前後の既成の「文壇」概念の崩壊が、小説の表現史の上で大きな転換点をもたらしていることなどを明らかにしている。

第Ⅱ部は、森鷗外『舞姫』、泉鏡花『高野聖』、田山花袋『蒲団』等の明治期小説から、埴谷雄高『死霊』^{しれい}、「第三の新人」の諸作等の戦後小説までを幅広く扱い、個別作品に周到な検討を加えながら、一人称小説における共同体と「個」の関係、複数の一人称視点の採用による独特な作品世界の構築、一人称と三人称の混交によるロマンティシズムの生成、卑近な日常感覚のメタファによる「戦争」という大状況の表現等々の、小説の「表現機構」の達成を具体的に検討し、第Ⅰ部の総論・原論の妥当性を論証している。

従来、近代小説の個別作品の表現に触れた研究は数多くあるが、「小説」ジャンル全体を貫く「表現機構」を考察し明らかにした研究は、本論文を嚆矢とする。しかも本論文は、豊富な資料への目配りと博識に裏打ちされた緻密な分析により、「表現機構」から見た卓抜な近代小説通史ともなっており、近代小説研究に新生面を開くものとして高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。